つながり

活動先：美浜町社会福祉協議会
クラス：岡多枝子先生

この１年間のサービスラーニング活動を通して強く実感したことは「つながり」である。行政機関と住民、社会福祉協議会と役場、住民間、学校と各ボランティア団体、教育と地域など様々な機関、人との相互の「つながり」を感じた。また、それらはその地域に限らず、生活の一部、その他地域ともつながっている。

サービスラーニング活動をするにあたって、ボランティアとの違いは何なのかに関して自身で見出したいと思った。実際に活動に参加して何が、どのように、ボランティアと違うのかを学ぶことを目的とした。また、密接である日本福祉大学の所在する美浜町をもっと知りたいという思いから美浜町を基点として活動することにした。美浜町は愛知県知多半島の先端部に位置し、人口は２万５千人、高齢化率は21％である。しかし、日本福祉大学生の下宿生の中には住民票を移していない学生もいるため、数値は変動し、定かではない。また、交通の便も悪く、「交通弱者」が多いという現状である。

まず、活動するにあたって６月に美浜町のボランティアネットワークの中心的な存在である美浜町社会福祉協議会で事前調査を実施した。 そこで、社会福祉協議会の地域における役割や美浜町のボランティアネットワーク、ボランティア活動の状況などについて伺った。ボランティア活動についての反応では「成長を感じる」「外部の風が入り新鮮で良い」ということだった。しかし、反面、「ボランティアが来たから困った」という声もあるようだった。特別養護老人ホームなどのボランティアでは、ボランティア達に利用者の方が気を遣い、かえって利用者の方が疲れてしまい、どちらがボランティアか分からないといった悪影響があるそうだ。特に学生の場合、単位の為だけに参加したという人は利用者の方に態度で伝わってしまい、それが利用者の方に不快感を与えることになっている。これを聞いて、ボランティア活動の自主性の大切さを感じた。

また、夏期休業期間中には地域の高齢者が月に１度集まる交流の場「ふれあいサロン」と中学生の夏休みの体験事業である「サマーボランティアスクール」に参加した。「ふれあいサロン」では レクリエーションや、おしゃべり、健康体操や作品作りを、会話を交えて行う。参加者一人ひとりが真剣に取り組む姿、楽しそうな姿はとても印象的であった。月に１度のこの場を待ちわびている方もいて、地域で生活するうえでこのような自由な交流の場は必要なのだと実感した。実際にレクリエーションを企画し、実践させていただいた。事前に何度もイメージを膨らませ、ルールについても検討したが、実践してみると思うようにはいかず、その場でより楽しめるように、分かりやすいようにと臨機応変に変化させることがあった。それを経験して、実践してからわかること、企画者と参加者での受け止め方の違いを痛感した。しかし、共通する部分として、一緒になって楽しめること、レクリエーション活動を通して話題が広がりコミュニケーションが取れることも強く感じることが出来た。「サマーボランティアスクール」ではNPO法人チャレンジドの夏休み行事や、

手話体験、点訳体験、高齢者施設の見学など様々な分野に中学生が自ら選択して体験学習を行う。参加した NPO 法人チャレンジドのイベントは学生それぞれに担当の子どもが振り分けられ、地引網体験や海遊び、バーベキューを通じて交流を図った。普段関わる機会の少ない障がいのある子どもや小学生と遊びや体験を通じて関わることでどんな子かということを自然と感じることが出来た。中学生の積極的な活動の姿は印象深く、中学時代でこのような経験を出来ることは、今後の進路選択にも大きな影響を与えると考える。

また、9 月に、美浜町社会福祉協議会のボランティアグループに登録している「海の子文庫」を紹介していただき活動見学を行った。私達のゼミは教職ゼミということで活動拠点に保育園、小学校、中学校を持つ海の子文庫に興味を持った。海の子文庫は子どもに本に親しんでもらうこと、子供と本を読み合うことにより子ども達と触れ合うことを活動目的にしているボランティアグループである。この日は野間小学校で低学年の生徒への公演を見学させて頂いた。ことばあそびうたや本の朗読、紙芝居、人形劇といったブックパフォーマンスを見た。海の子文庫の皆さんは、「子ども達の笑顔や『楽しかったよ』『あの本良かったよ』などの言葉が嬉しく、また頑張ろうと思える」と言っていた。観客という立場だと自然と本の世界引き込まれていくような感覚がした。はじめは騒いでいた子どもたちも始まると次第に静かになり集中して聞いていた。子どもたちの反応は素直で感じたことをありのままに表現していると感じた。そして演者も淡々と進めるのではなく、声の抑揚や表情、スピードなど感情が込められていることを強く感じた。これは本の読み聞かせに限らず、日常の対話でも重要なコミュニケーションツールになると考える。

さらに、短期ボランティアとして9月23日に、第２２回障がい児者ふれあい運動会ボランティアとして参加させて頂いた。障がい児者への競技参加支援やチーム内での応援係、運営スタッフとして仕事を行い、一緒に競技に参加しながら関わった。

そして 10 月 14 日の産業祭り内で行われた、ボランティアフェスティバルでは体験コーナーの中の NPO 法人チャレンジド・知多南部自立支援協議会障碍理解啓発ワーキンググループの車椅子・視覚障がい者ガイド体験ウォークラリーに運営ボランティアとして参加した。車椅子体験では参加者の方に車椅子の使い方の指導を行い、自動販売機など私たちが何気なく済ませていることが、どんなに困難かを体験してもらった。視覚障がい者ガイドヘルプでは視覚障がい者の方と一緒に歩き、目の代わりになって障害物があることを知らせ、身近な困難を知ってもらう機会となった。

これらの活動に参加して、地域住民は「同じ地域に住んでいる」という大きなつながりを持っているのだと学んだ。例えば高齢者と小学生で年齢ははるかに違うがここに住んでいるからこそ感じること、分かる事は同じである。同じ地域で生活しているということこそが一番の住民の「つながり」だと感じた。たとえ障がいがあってもその地域に住んでいるという事実は変えられない。だからこそよりよい生活を送る為に住民間のネットワークが必要になってくるのだと考える。また、今回美浜町で活動して日本福祉大学生の美浜町への関わりの希薄さを感じた。ボランティアサークルの中には美浜町で活動しているグループもあったがそれはごくわずかであり、学生の半数近くが美浜町に住んでいる割にボランティア活動への参加が少ないことが気になった。今後はより学生の参加意識を高め、美浜町住民と学生との「つながり」を深めていけるよう活動を継続していくとともに、啓発活動もしていきたい。